

神津俣祐先生の故郷を訪ねて

八木 健 三¹⁾

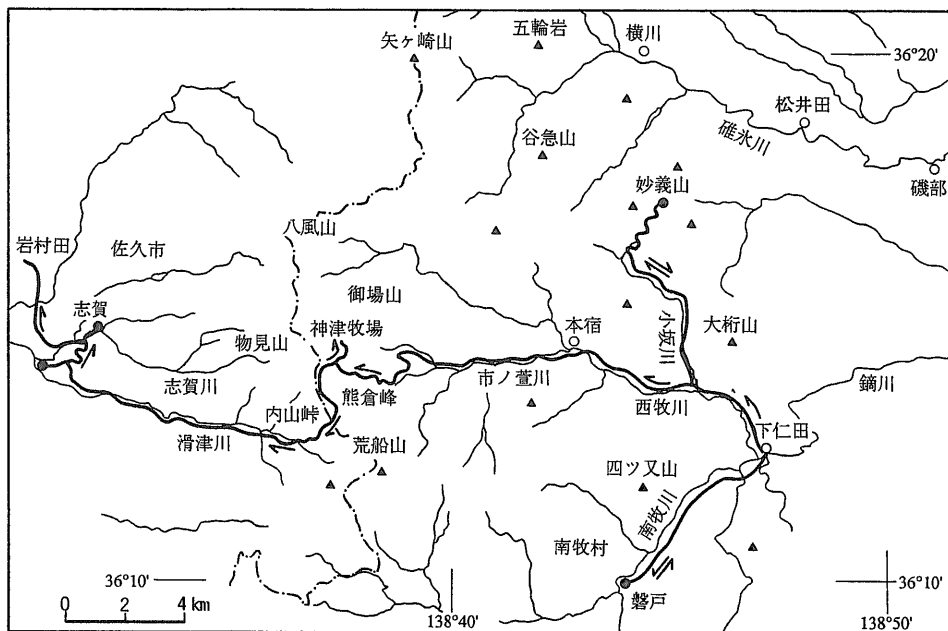
はじめに

数年前「神津俣祐と実験岩石学」(八木, 1992)を書いたとき, 神津一族が始めた神津牧場をはじめ, 先生の郷里を訪れて見たいと思った。そんな話を「地質ニュース」副編集長(当時)の佐藤興平さんにしたところ, 「神津牧場は私の実家に近いのです。いつかご案内しましょうか」という親切なお返事だった。それで, 神津門下の親しい友人, 三枝守維(資源地質学会名誉会員), 加藤磐雄(岩鉱学会, 地質学会名誉会員)の両君に話したところ, 二つ返事で参加することになった。

1994年11月某日, 上野発, 信越線特急あさまに乗り込む。赤城山や浅間山を眺めながら高崎に着く。ここから始めて支線の上信電鉄というのに乗り換え,

終点の下仁田に着く。静まり返った駅を下りると, 佐藤さんの笑顔が待っていた。

ここから南牧川沿いの静かな道を20分ほど車を走らせると, 南牧村磐戸の佐藤さんの実家に着く。大きな門をくぐって入り, 母堂ます夫人のお迎えを受ける。私の母と同名なのが懐かしかった。ご尊父の逝去されたあとはお一人暮らしの由。たいへんお元気で喜寿とはとても見えない。佐藤さんが時折筑波から帰省して孝行しておられるとのこと。俳句を嗜まれ, 後日私も立派な句集「ひとつばな」を戴いた。庭には丹精の松の盆栽2鉢があり, 神津先生のお宅に百鉢ほど松の盆栽があった思い出話が出た(加藤, 1991)。しばらくお話をしたあと, 佐藤さんの奥さんと可愛い真平くん(2.5歳)も加わって佐藤さんの実家を出発した(第1図)。



第1図 巡検経路

1) 北海道大学・東北大学名誉教授:
〒005 札幌市南区藻岩下2-5-10

キーワード: 神津俣祐, 信州, 志賀, 神津牧場, 妙義山, 荒船山

妙義山

まず下仁田まで戻り、それから小坂川の溪谷を北に遡る。やがてハイウエーから尖った頂が見えてきた。まもなく妙義山パーキング・エリアに着く。すでに多数の車が並んでいた。

妙義山は北から白雲山、金洞山と金鶏山の3つの山塊からなっている。我々が着いたのは金洞山で、最も勝景の中心である。見上げる青空には鋭く尖った岩峰が鋸の歯のように連なり、百メートルを超える絶壁で断ち切れ、その下には第1石門から第4石門などの岩塔が並んでおり、燃え立つような赤、橙、黄色に紅葉した木々がそれらを彩っている。まさに圧巻。手前の杉の木立の中には、中之岳神社の境内も見える(口絵4)。

郷里長野への往復で、何回となく信越線の車窓から妙義山は見てきたが、それらは白雲山とはダムでつくられた妙義湖で分かたれた「丁須の頭」とよばれる山塊だ。断崖のスケールからみても、金洞山の全景がはるかに印象的である。加藤君と私がスケッチをしている間、三枝君、佐藤さんは盛んに写真を撮っていた。

妙義山を構成しているのは、灰褐色の輝石安山岩の溶岩と、大小の溶岩の岩塊を含む淡褐色の溶結凝灰岩であるが、大きな断崖を作っているのは主に溶結凝灰岩で、その量は溶岩よりはるかに大量のように見られる。大規模の激しい火砕流がこの火山活動の特徴付けていたのであろう。これらには、柱状節理や板状節理がよく発達し、さらに水食作用も加

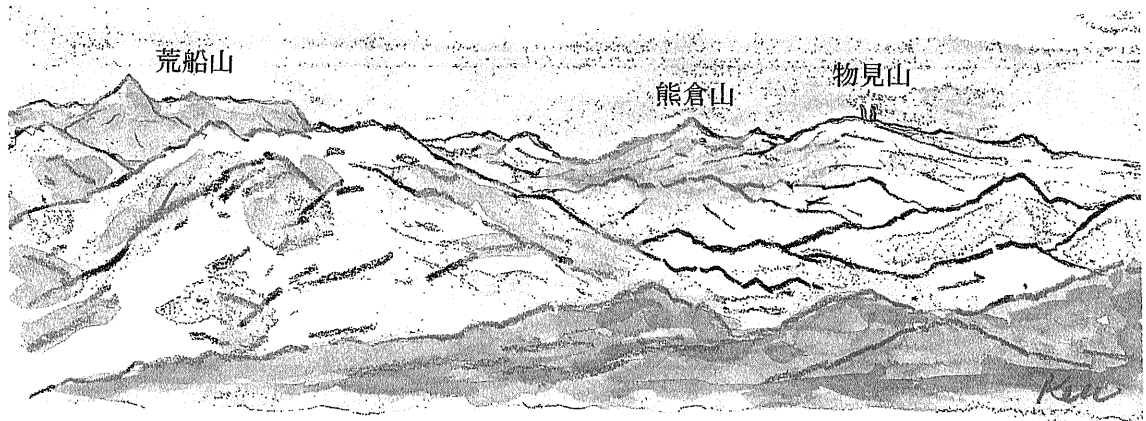
わって、上に述べたような様々の奇観を呈しているのだ。

ここから西方を眺めると、上信国境に聳える山々が一望の内に納まる。最も南には平坦な面上にピラミッド型の頂を乗せ、さらにその平坦面の北の端が急な斜面で断ち切られた特徴のある山が見える。これがこの地域で最高の荒船山(1,423m)。その形から荒海をかき分けて進む船の形を連想して、この名が付けられたのだろう。

その右に熊倉峰(1,234m)がつづき、物見山(1,375m)の山腹のやや平坦な面に神津牧場が僅かに望まれる。その右に御場山が裾をながく広げている。これらの山々の手前には、西牧川の本流や支流によって深く削られて谷が広がり、複雑な地形を示している(口絵2, 第2図)。ここでの観察を終えたのち、神津牧場を目指して出発する。ハイウエーに出てから立ち寄ったそば屋の名物そばがたいへん旨かった。

神津牧場

小坂川に沿って下ったのち市ノ萱川の溪谷に入り、これを遡っていく。かなり深い沢で南と北の両斜面がせまる川の底にある道を西に進み、市野萱から左の沢に入る。いくつかのトンネルを抜けると、道はヘアピン・カーブの連続となり、ついに分水嶺の尾根に取りつく。これが妙義・荒船スーパー林道、視界は一拳に広がる。かつて南アルプス・スーパー林道が大規模な自然環境破壊をおこして、大きな問題と



第2図 妙義山中之岳神社付近から見た上信国境の山々

なったことを思い出した。幸いにしてこのスーパー林道には、そのような問題は聞いていないが、どう見ても林業のための道であるとは思われない。まわりには木材になりそうな林は全然ないのだ。しばらく北に進み小高い地点に差しかかると素晴らしい眺望が展開した。

南には荒船山の北面の大断崖が見える。厚さ100mをこえ、見事な柱状節理が発達する輝石安山岩の荒船溶岩が、基底の第三紀兜岩層をおおっている状態がはっきりと観察される。溶岩のなだらかな頂は枯れ草に覆われ、柱状節理が秋の陽にくっきりと浮かび上がっているのが印象的だった(口絵3)。

北を見よう。そこには浅間山を背景にして、物見山の東の平坦面に広がっている神津牧場の全景が眼下に眺められる。浅間は僅かに白い煙をたなびかせ、山腹には弥陀ヶ城岩の谷が刻まれている。山々の雑木林は紅葉も過ぎ、褐色に染まっているが、牧場の草はまだ青々としている。しかしジャージー種の牛の姿は見えない。もう畜舎に入っているのだろう。赤い屋根の建物が並び、それに交って青い屋根の建物もある。さらに大きなサイロも見える(口絵1)。

スーパー林道から下る道を進むと神津牧場に入る。公園のように見事に整えられた中を歩くと、最初に目に入ったのは大きな花崗岩の記念碑で、「明治20年(1887)創立我国酪農発祥の地 神津牧場」と記されている。裏の由来記を見ると、「明治・大正・昭和と牧場の発展に寄与した石井芳之氏が退任にあたり、この碑を寄贈された。昭和57年(1982)5月神津牧場主 中村真文書」と記されている。これを見ると神津牧場は既に神津家から他人の手に、移っていたことがわかる。

さらに庭園の中心部には創設者「神津邦太郎翁像」のブロンズ胸像が建つ。広い額、大きな目と口が強い意思を示し、胸の下までを現した特色ある胸像だ。「昭和35年(1960)10月建立 高田博厚作」と記されている。

神津家は長野県北佐久郡志賀村(現在は佐久市志賀)の豪族であったが、それには「黒壁」「赤壁」と呼ぶ2つの家系があり、それぞれ家の壁が黒または赤であったので、このように呼ばれていた。邦太郎(1866-1930)は黒壁に属し、慶応義塾を卒業後、上海に渡り貿易業に従事し、1886年帰国した。翌1887年乳牛30頭を購入、我が国最初の洋式牧場を開設



写真1 神津邦太郎翁の胸像をかこんで、三枝君撮影

した。大いに事業は発展したが、利益を無視した経営のためついに破綻し、1919年田中銀之助氏に売却したが、名称そのまま残された。またこの胸像の横に、「神津牧場開設百周年記念碑」が中曾根康弘氏の署名で昭和62年(1987)に建てられている。ここで今日の記念に一同で写真をとった(写真1)。なお後で述べるように、神津先生は赤壁の方である。

広い園内には神津牧場記念館を始め、色々な建物があつたが、時間も無かったので見学は割愛した。売店でバターやチーズなどを土産に買い求めたが、真平くんは特製アイスクリームにご満足だった。

神津先生の本家・赤壁の家

一応これで目的の神津牧場も終わったので、再び妙義・荒船林道を南に進み、熊倉峰の横の内山峠から信州側を下る。スーパー林道を通る時にも気づいたのだが、西側すなわち信州側の山地は極めてゆるやかな傾斜で西に傾いているが、東側すなわち上州側ははるかに急峻で、南牧川、西牧川などにより深くえぐられている。これは上州側に雨量が多く、また谷口の標高差の大小によって、浸食の進展に著しい差異のあるためであろう。

滑津川の狭い谷を下っていくと、やや開けて人家がでてくる。ここで北に曲がって低い山をこえて志賀川の流域の部落志賀に入る。これが昔の志賀村の中心で、志賀下宿、志賀中宿と志賀上宿に分かれている。先生の本家はその志賀中宿の山際に建っていた。それは赤い壁に囲まれた大きな屋敷で、その外側を同じ赤い壁の長屋門が取り囲んでいる。その壁



写真2 神津先生生家の長屋門入口で、佐藤さん撮影

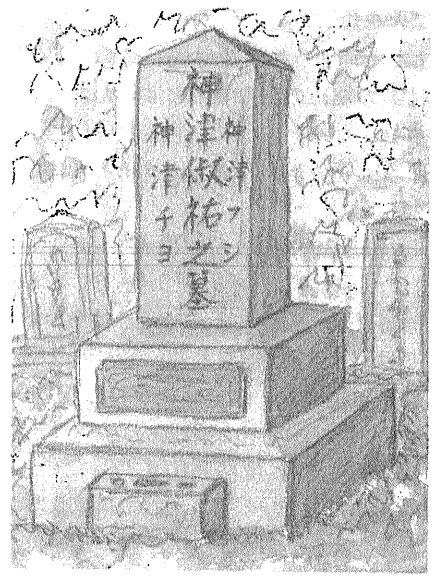
の色は鮮やかなやや薄い赤色である。窓枠なども真新しく壁とともに、改修されたようである(口絵5)。なおこの東の方には黒壁の家がある。戦前土地の人々はこれらを赤壁御殿、黒壁御殿とも呼んでいたという。

家の後ろには小高い尾根が延びているが、その頂には柱状節理の発達した溶岩の崖が露出している。これは信州方面に広く分布するため、佐川栄次郎(1898)によって「信州溶岩」と呼ばれたものであるが、デーサイト質の志賀溶結凝灰岩である。

先生は東北大学退官後、東京蒲田の自宅に住んでおられたが、お宅は1945年3月大空襲で全焼したため、郷里の志賀村に戻りこの長屋門に数年間住まれた。1947年夏の一日、私が先生をお訪ねしたときには、門に向かって左の狭い部屋に奥様とご一緒におられた。蒲田の家は伺ったことはなかったが、仙台のお宅は広大な二階建てで、庭には百鉢もの松やさつきの盆栽が並べられていた。こんな生活をしておられた先生にとっては、さぞ窮屈だったろうとお察ししたのであった。その後は、鎌倉二階堂にゆったりとしたお宅を新築され、余生を楽しまれた。

この長屋門には「これは藤村の旧居ではありません」という札が下げられていた。この赤壁の主人であった神津 猛氏が島崎藤村のよき理解者であり、後援者であったので、「破戒」ゆかりの地と思って、ここを訪れるファンが多かった。これに悲鳴をあげ、管理している孫の得一郎氏がこの札を下げたということ、後で猛氏の子息文雄氏から伺った。

長屋門を入り、母屋の土間を抜けて裏門を出ると、菩提寺、法禅寺の墓地に通ずる道である。その奥まったところに、先生のお墓があった。黒っぽい安



第3図 神津先生のお墓。

山岩でできた墓には大きく「神津倅祐之墓」と刻まれ、これを囲むように若くして亡くなられたフジ夫人と、その後のチヨ夫人の名が記されている(第3図)。

その墓の横の面には「法雲院理秀倅翁居士 俗名倅祐 昭和30年(1955)2月11日、享年74歳」と記されている。私たちはすでに先生の年を越えているのかと感慨を覚えた。なおフジ夫人は大正13年(1924)3月14日没享年25歳、チヨ夫人は昭和55年(1980)10月21日没享年80歳となっている。かりにフジさんが20歳で結婚したとすれば、神津先生は38歳となる。当時としては晩婚だったといえよう。

これで神津先生の故郷のルーツをたずねる旅も終わった。これからさらに岩村田を経て小諸駅まで行く。朝から案内して頂いた佐藤さんに心から感謝して別れ、列車に乗って上山田温泉の宿に行く。そこにはすでに赤壁の神津文雄氏、私の50年来の友人、塩野入忠雄氏(長野市・上田市の中学校長歴任)と徳永英夫氏(坂城中学現校長)が待っていた。神津さんは長野市最長老の現役歯科医、神津家の歴史に詳しく、この「信州のドン詰まりの山村」である志賀村に、いかに多くの人材が輩出したかについて、郷土の研究誌「千曲」に「志賀村の先人たち」の連載を発表している(神津、1987-90)。

かつて赤壁と黒壁とは本家争いをして裁判沙汰になり、とうとう大審院までいったがそれでも決着がつかない。両家からは大勢の青年が慶応義塾に学ん

だことから、福沢諭吉が仲裁の労をとって和解を勧め、漸く収まったという。神津先生の兄の藤平氏は長野電鉄の社長であったが、昭和の初めに郷里の志賀村に因んで信州下高井郡の志賀山を中心とした地域を「志賀高原」と命名し、観光開発を進めたところこれがアピールして、多くの観光客が来るようになった。我が国で学術以外に「高原」が使われたのはこれが最初であるという。

なお私も志賀高原は、東北大学の卒論以来何回となく訪れているが、藤平氏の観光開発の跡を見ると、地形や森林の改変は最小限におさえ、まさに今日の「持続可能な開発」であることに敬服した次第である。

神津家に関する色々なエピソードを神津さんから伺うことができたのは有り難かった。私たちが在りし日の神津先生のことをお話して、郷土の人々とともに改めて師を偲んだのであった。

その翌日我々3人は小諸懐古園を訪れたのち、浅間火山観測所を見学した。小浅間山に登ると、妙義山、荒船山など昨日まわった山々が一望のうちに収められ、また新たな感銘を覚えた。それから山をくだり、帰京の途についた。

地質学ノート

この地域の地質については、もう百年近い昔に佐川栄次郎氏の「荒船火山地質調査報文」(1898)がある。これは佐川氏が東大の卒業論文として僅か1年の間に纏めたものが、震災予防調査会報告として出版されたのである。佐川氏は妙義山、荒船山、物見山など全てが、同一の火山体を構成するものとして荒船火山と呼び、妙義山から物見山にかけての地質断面図を描き、その後の浸食作用によって幾つかの山体に分かれたとの見解を示している。後述のように多くの問題点はあるが、学生時代にこれだけ詳しくまとめあげた努力には感銘を禁じえない。

なお蛇足を加えると、佐川氏はその後1907年には鉱山局技師から、新設の東北大学の教授候補者に選ばれ、3年間の欧州留学の後、1911年には東北大学教授に任命された。同じく教授候補者の矢部長克博士は、翌1912年帰国し教授に任命された。ところが地質学教室の運営について、二人の間で激烈な意見の衝突があった。ついに佐川教授は「オレは何

処でも務まるが、矢部は大学以外ではやっていけないだろう」と言って3年後輩の矢部教授に譲り、一度も講義することなく教授を辞任し三井合名会社に入った。

この間の事情を、地質学雑誌20巻2月号(1913)は次のように記している。

「東北大学佐川教授は職を辞し、三井合名会社に入られたり、吾人は東北大学の為に深くこの謹厚篤学の教授を失いたるを惜み、三井鉱業部にこの新進有為の応用地質学者を得られたるを慶して已ざるものなり」

なお神津先生はこの年、教授候補の講師として東北大学に赴任し、翌1913年には米国と英国での3年間の留学の途についている。

その後小藤文次郎教授(1913)はこの佐川説を否定し、妙義山や荒船山などの山々はそれぞれ独立の火山として、噴出したものとしている。

八木貞助氏(1931)は荒船火山において、第三紀層の基盤の上に出来た湖に堆積した兜岩層をおおって荒船溶岩が噴出したことを明らかにした。含まれる植物化石から兜岩層の時代を洪積世とし、荒船火山の活動は洪積世であるとした。この溶岩は荒船山の外、物見山、寄石山など第三紀層の山々の頂をおおって志賀方面に流れ、その上に佐川氏の信州溶岩を乗せている。また物見山腹から神津牧場にかけては、この第三紀層が分布し、一部には兜岩層も見られることを指摘した(八木、1936)。

神津先生は1945年東京大空襲で家を失われたあと、志賀村の神津本家に疎開されたことは上に述べたが、たまたま郷里では「北佐久郡志」編纂の作業が始まったところで、先生は早速「自然編地質部門」の顧問に就任を請われた。そのため1947年以後14回にもわたって、北佐久郡内の地質岩石の实地調査を行われた。しかし、70才になった先生には調査はきびしかった。それで1950年には門弟の群馬大学木崎喜雄教授が調査に当たることになった。二人の共著「北佐久郡志自然編・地質」が刊行されたのは、先生の逝去直後の1955年3月であった(神津・木崎、1955)。

本書においては「この地域の火山岩類は岩質及び構造がことなり、妙義山と荒船山は別個の火山体と考える。いわゆる信州溶岩はこの地域西半に広く分布し、何枚かの溶岩流からなるため崖が発達し、こ

の地形的特徴で分布は容易に決められる」と述べている。当時は未だ「溶結凝灰岩」は知られておらず、溶岩として扱われていた。

その後飯島南海夫氏(1956)は信州溶岩が、デザート質の溶結凝灰岩であることを始めて明らかにし、北部フォッサ・マグナに発達する溶結凝灰岩すべてと同じく、その時代は古期鮮新世であるとした。従ってこの志賀溶結凝灰岩におおわれる荒船溶岩は新期中新世に活動したと述べている。

河内晋平・河内洋佑氏(1963)は荒船火山地区の火山活動が、下部から兜岩累層、荒船山溶岩、行塚岩脈、志賀溶結凝灰岩、水落観音溶岩の順序を示すことを明らかにし、フォッサ・マグナ帯中央部における瀬戸内区と共通な特性を示すと述べている。

このようにこの地域の火山活動については、種々の見解が出されたが、その後はあまり研究が行われて来なかった。しかし最近に至り、群馬大学野村哲氏や妙義山団体研究グループは群馬・長野県境付近の新生代火山岩類について、盛んに研究を進めている。特にそれらの岩石のK-Ar年代や古地磁気を測定し、この地域の地史を明らかにした。つぎにそれらの火山岩類の年代を示す(野村, 1991, 野村・海老原, 1988)。

荒船溶岩(上部本宿層)	{	5.37Ma
	{	8.99Ma
妙義累層(中之岳部層)	{	4.66Ma
	{	4.77Ma
〃 (四ツ谷部層)	{	5.74Ma
	{	13.7Ma
水落観音溶岩	{	3.81Ma
	{	4.93Ma
志賀溶結凝灰岩	{	3.12Ma
	{	3.35Ma

しかし、これらの火山岩類は種々の程度のグリーンタフ変質作用を受けているため、測定値がかな

りばらつき、層序に従って下位から上位へ、数値が必ずしも小さくなっていない。しかし荒船山と妙義山の活動はともに後期中新世で、ほぼ同時であること、これに対して、志賀溶結凝灰岩は鮮新世であることは明らかである。さらに年代測定の精度を上げて行くことが期待される。

おわりにこの巡検の案内をしていただいた佐藤興平氏、神津家の人々について種々ご教示いただいた神津文雄氏、およびこの地域の地質年代についてご教示いただいた野村 哲教授に厚くお礼を申し上げます。

引 用 文 献

飯島南海夫(1956):フォッサ・マグナ北部の玄武岩及び玄武岩質安山岩の地質年代について。信大教育報告8号, 169-179。
 加藤磐雄(1991):おりおりの山 おりおりの河。杜陵印刷。
 河内晋平・河内洋佑(1963):霧が峰, 荒船山地区における鮮新世火山活動。地球科学, 64号, 1-7, 65号, 33-36。
 小藤文次郎(1913):草津白根火山地質調査報文中の注記。震災予防調査会報告, 第78号。
 神津文雄(1986-1990):志賀村の先人たち。(1)-(5)千曲一郷土の研究。
 野村 哲(1991):関東山地北側の新生代末の隆起過程。地研専報, 38号, 95-102。
 野村 哲・海老原充(1988):群馬県西部新生代火山岩類のK-Ar年代と古地磁気。群馬大学教養部紀要, 22, 65-78。
 佐川栄次郎(1898):荒船火山地質調査報文。震災予防調査会報告, 第19号, 47頁。
 八木健三(1992):神津俣祐と実験岩石学。地質ニュース, no.456, 57-67。
 八木貞助(1931):信濃荒船火山兜岩の植物化石と周辺地質との関係。地学雑誌, 43, no.507, 268-283。
 八木貞助(1936):浅間火山。信濃教育会北佐久部会, 516頁。

YAGI Kenzo (1997): A journey around the birthplace of Prof. Shukusuke Kôzu.

<受付: 1996年8月19日>